

芥川だより

発行日 * 2024年9月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

どうして大企業は多額の利益を出せるのか？



利益を生む魔法のようなものはない。利益は払うべき賃金・工賃を払わずにサービス労働を社員から下請けに至るすべての人に強要しているから利益が出る。本来は働いている人々の金なのだ。こんなことは誰でも知っているが、誰も言おうとしない。馬鹿を見るだけだからだ。左遷か首切りにあう現実を恐れるからだ。

大企業の内部留保の金はますます膨らみ、少子高齢化は進む。なんというバカげた社会現象か、マスコミも政治家も評論家も分かっているが何も言わない。アウトサイダーにされるのを恐れ、誰かが何とかしてくれると思いながら、既得権益にしがみついている。こんな社会は誰も何も言わない独裁国家と同じような恐ろしさを秘めている。

私が働く工事現場の下請けの監督は元受けが受注金額の1割を取って下請けに丸投げし、2次下請けは次へ投げる。うちは4次下請けだが、もうけはほとんどない。こんなことは工事では当たり前になっている。誰も文句を言わないし、仕事があるだけでありがたいと黙々と働いている。入社した会社で人生が決まるようになっていく。だから、進学競争が激しくなり有名大学から有名企業への就職・結婚へと続く勝ち組といわれるルールに乗りたがる。

監督に塗装作業員の日当を聞くと「イチハチ」18000円とはっきり言う。幾人かのグループがあるので、リーダーに全額渡すから、グループ内で適当に分けるのだろう。雨や仕事がない時の日当は0（ゼロ）だ。交通費も保険もここから払わなければいけない。これでは、未来への期待がもてない。結婚どころではない若者が多い。

政治家もマスコミもみんなわかっている。貧乏人からは金がとれない。大企業や富裕層から金を集めるから、どうしても彼らの希望を聞き続ける。金持ちに都合の悪いことは、一切伝えない。女性が結婚するときに考えるのは、将来経済的に困ることがないように、大企業勤務の男と結婚する。女性は、男と結婚するのではない、大企業に惚れて結婚するのだ。大企業の功罪を今一度考えないと無責任な怪物が社会を食い荒らすことになる

死をめぐるあれやこれ(117) 石川 吾郎

災害が多発する国に住むということ

今年の異常な夏の酷暑はなかなか終わろうとしない。この国が災害を有り余るほど抱えた国であることを、この夏つくづく感じた。耐え難い酷暑だけでなく、近づく巨大地震に津波、台風などの風水害。それに火山噴火も。◆この国に住むということは、このような災害とともに暮らすことだ。そして政府はこれらの災害から国民を守る義務がある。近年の政府はこれを怠ってきた。南海トラフ巨大地震と巨大地震は、時期は予測できないものの近々襲来することが確定している。この災害によって何十万人の死者が予測されている。にもかかわらず国は有効な予防対策を打って国民を救おうとするようには見えない。◆正月の能登半島地震のその後を見てもそれがわかる。半年以上も経過しても、とても復興されているとは言えない。政府はこの地域を切り捨てようとしているように見える。◆戦後に整備されたわが国の交通や上下水道などのインフラは、老朽化して更新が必要になってきているが、政府は国民の命や生活を守るインフラの整備をこの三十年間怠ってきた。これは予算をみれば明か。国家予算では必須の複数年度にわたる土木建設のプロジェクトといったものは近年さっぱり見ない。国土のインフラ整備が単年度でできるわけではない。◆昨今指摘されるようになったが、巨大な権力をもつ財務省がその設置法の任務「健全な財政の確保」をたてに税金

以上の政府支出をさせない。財源は税金だけで国民も信じ込まされている。しかし必ずしもそうではない。◆国民の生命や生活を守るためのインフラ整備や防災といった巨大プロジェクトの必要性が今まさに差し迫っている。複数年に渡る国家プロジェクトとして、建設国債によっての政府支出も必要だろう。できる能力があるのに国民を救うことをしない。この国はよほど重篤な状態に陥っている。

芥川だより二二二号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム117	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 126	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談76	祖蔵哲	2
大峰奥駆道82	下村嘉明	5
ボケ老人の雑話	明石幸次郎	5
その5		
オクラの山たより96	因了生	6
隠された歴史71	満田正賢	11
俳句	影山武司	13
編集後記	S K生	13
ふみの道草75	山椒魚	14

素老人☆よもだ帳 (126)

坂本一光

◆川柳は世界を詠う

―二つの広告に思うこと(再び)

古くて、新しい話である。前に本紙に紹介したことだが、今一度書いておきたい話題である。

一九八四年から二十六年間、私は山陰の大学に単身赴任をしていた。二つの広告を見たのは、一九九一年にソ連邦が崩壊し米ソの冷戦が終結したしばらく後であった。週末の夜遅く家族が待つ家に帰るため新大阪駅に降りると、コンコースの壁一面に見たこともないような大きな看板が掛けられていた。某アパレルメーカー○○商会の広告で、上段に大きく、「想像力、資本主義」とあった。ああ、冷戦終結の勝利宣言だと私は思った。

同じ頃、もう一つの広告に出会った。新大阪駅から大阪駅に出て京橋駅に回り京都市きの京阪電車に乗り込んだ時である。二十三時を疾うに過ぎていくが、大阪ではまだ通勤時間なのか、車内は仕事から帰る人たちが満員だった。遠目にチラッと見た吊り広告には、「赤が一番美しい」とあった。この電車の沿線にある某○○電器のビデオデッキを宣伝するキャッチコピーである。前の車両までずっと、吊り広告はすべて同じものであることが遠目にもわかった。「想像力、資本主義」の時代になって我が祖国日本も「赤が一

番美しい」なんて広告を出せるようになったのだと、電車で揺られながら私はしみじみ思ったものだ。

ところが、である。だんだん車内が空いて来て吊り広告に近づいた時である。何と、キャッチコピーは「赤が一番美しい」であった。なぜか。録画上赤色の再現は最も難しいことであったが、我が社は総力を上げて何処にも負けない赤色の再現に成功したという新製品の自慢なのである。自分の早とちりに愕然としつつ、しかしそうであればなおさら、「赤が一番美しい」が最適の広告ではないか思ったことであった。そして、「想像力、資本主義」の時代になってもそれは決して口にしてはいけない言葉なのだ、妙に納得した。

その後、今日まで世界はどう変わってきただろうか。二十数年後、亡くなられた安倍晋三氏がまだ総理大臣をしていた頃、二つの広告を思い出して私は歌を詠んだ。

広告の「赤が一番難しい」を私は今でも美しいと読む

二十一世紀なっても、「想像力、資本主義」の世界は紛争と戦争に明け暮れている。まるで百年、時代が逆戻りしたような世界で私は川柳を詠んでいる。生きていることを詠うが、同時に、生きることに関わる時代の問題も私は詠う。時事川柳を嫌う人もいるが、川柳は、私と私に

関わる世界のすべてのことを、何でも五七五に詠うものだと思うっている。

「遠くて近いもの紙の裏表」、それはまた、「近くて遠いもの紙の裏表」でもある。「世界を見るものは自分を見るだろう」も同じこと。世界と私は驚くほど近くにあるのだ。

「本当は赤が一番美しい」、私は今でもそう思っている。
(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲学爺いの時事放談(76)

祖蔵哲

〜世界を加速する

「長期主義」の哲学

暑い、否、熱い。熱帯夜、最低気温25度の夜。もう9月の秋なのに何日続いているのだろう。真夏日は最高気温30度以上、猛暑日は最高気温35度以上の日だが、いずれも連続日記録が更新されている。今年の最高気温は浜松で40度越えを記録した。過去の最高気温は41.1度らしいがどこまで気温は上がるのか。もうすでに体温を超えて沸騰の域

だ。これでは文明の利器がないと都会では住めない。人間は短期的に生存するための必要なエネルギーを得、それを消費することによって環境を悪化させ、それで自らの生存を脅かしている。誠に異常である。さて、異常気象と同じく時事ニュースでも異常状態が続いている。

相変わらず終わりのないイスラエル・ガザ戦争では8月1日にハマス最高幹部がイラク訪問中にイスラエルによって暗殺されたが、それ以後相互の報復戦争がさらにエスカレートしている。もう一方のウクライナ戦争ではこの今月中旬にウクライナ軍がロシアに越境攻撃を開始した。お互いの領土をめぐっての分捕り合戦の様相を呈してきている。少しでも有利な状態で終戦を迎えたいという嘗ての日本軍の様相を呈してきている。この二つの戦争に関して、8月9日の長崎原爆の日にイスラエル大使の非招待に反発した欧米駐日大使らが式典を欠席した。これも全くおかしなことで、ロシアの大量殺戮は非難するが、イスラエルの方は正当防衛といってこれを支持するダブルスタンダードである。その親玉アメリカでは、大統領選挙に向けて共和党トランプの対抗馬が紆余曲折のうえハリス副大統領に決定した。しかし、選挙戦はフェイクや中傷合戦による低レベル状態で推移しており、誰が大統領になっても世界状況は改善されないと思われる。それは日本でも同様で、岸田首相が次期自民党総

選挙に出ないことを表明した後、雨後の筍の如く候補者が乱出し、まともな政治論争が行われていない。同時期に行われる野党立憲民主党の党首選挙も同様のことが言える。

一方で政治とは無縁であるはずの今夏のスポーツ行事、パリオリンピックと選抜高校野球大会がどちらも終了したが、それぞれには差別や偏見、政治問題が浮き彫りになっていった。オリンピックではジェンダー差別問題、高校野球では民族問題である。いずれも昨今のSNSなどのネット空間で問題がエスカレートしており、表現の自由や匿名性、責任などの基本的な人権問題がまず議論されるべきであろう。

さて、この記事を書いている時点では大型台風10号による進路予想やその防災対策についての話題で世の中が大混乱に陥っている。規模の大きさに加え、遅い移動速度による進路予測の困難さが混乱に拍車をかけている。これも地球温暖化による異常気象の影響であろう。災害といえば、8月8日、宮崎県で起きた最大震度六弱を観測する地震を受け、気象庁は初めて、南海トラフ地震の臨時情報「巨大地震注意」を発表した。それを受けて各地ではこれも時期に関する予測やデマが多く発生して大混乱を引き起こしている。

このような世界規模の混乱、混乱の発生原因は自然災害を含めて何らかの部分

ですべて人間が関係している。どうもこのまま放置すれば世界は滅びてしまうのではないのかという不安が現実問題になつてきており、それは実感されている。そこでいかに人類が生き延びるのかを考える思想、主義が次々と生まれている。これがポストヒューマンの思想である。ややSF的な空言と思われるが、思想が現実を形作るようになっていく。それには哲学が深く関与している。はて、このような哲学が果たして本物なのか。

(1) ポストヒューマンの思想、加速主義

「加速主義」とは、資本主義の発展をむしろ促進しその矛盾を早く到来させることによって世界を変革するという思想である。資本論を著したマルクスも高度に発達した資本主義は階級格差が出現し革命によって社会が変革されると説いた。この意味では革命は資本主義の一定の発達レベルによって出現すると考えられていた。このマルクスの思想は現代の加速主義から言えば左派加速主義といえる。

現代の加速主義は資本主義での「技術」を無条件に発展させ、この効用により自らの矛盾を解決させ資本主義の延命を図ろうという思想である。これを人間自身にも適応されると人間を越えた人間IIポストヒューマンの誕生となる。ポストヒューマンは人類の存続のために存在する一種の「神的存在」とみられることもあ

る。ポストヒューマンを文字通り、「超人間」と解釈すれば、脳にコンピュータを移植し、筋肉に動力を埋め込む、まさに「サイボーグ」も意味される。しかし、そのような物理的改変なしに思想によって人間を変革しようと言うのが現代のポストヒューマンである。

(2) 効果的加速主義と効果的利他主義

加速主義の元祖マルクスが左派加速主義であるすれば、現代の加速主義は右派加速主義といってもよい。右派とは保守のことで現体制維持を意味する。その中でも特に後に述べる「効果的利他主義」との関連で、この右派加速主義は「効果的加速主義」と一般に呼ばれるようになってきた。

一昨年の話題になるが、人工頭脳チャットGPT創始者のひとりサム・アルトマンが突然役員を解任された後、再び復職したという騒動があった。この事件の背景にあったのが「効果的加速主義」と「効果的利他主義」の対立である。当時、役員が多くが「効果的利他主義」派であり、その中でCEOアルトマンは数少ない「効果的加速主義者」であった。アルトマンの無制限なAI人工頭脳開発に役員達が反発し、多数決で解任したことにより事件は始まった。

「効果的利他主義」とは「収入の10%以上を、可能な限り費用対効果の高い慈

善団体に寄付しよう」と誓約したコミュニティが形成されているように「慈善団体が働くよりも、高収入の職業を得て収入の一部を寄付する方がより『効果的』である」という考え方を共有している人々だ。「動物にも権利がある」と説いたオーストラリアの哲学者ピーター・シンガーなどがこの名称を使い始め多くの賛同を得たとされる。この思想はベンサムが始めた「功利主義」の考えを踏襲している。すなわち「結果第一主義」である。

カント的な「倫理」「義務」からの動機に基づいて善行をなすのではなく、より結果が効果の高いものへシフトすることによって社会全体の利益を最大にしようというものである。極端に言えば、隣で困っている一人の人を助けるよりも、その金を集めより多くの人を救おうという「感情や義務感」からは離れたより大きな結果を重視した実務的行動である。

さて、解任劇は多数の一般社員が「効果的加速主義」を支持したことにより、アルトマンの復職がなされたことで逆転した。この騒動により、結果として効果的加速主義は効果的利他主義とも結びつくようになったのである。つまり、無制限な技術開発の加速推進が効果的な結果を生むということだ。

衆知のように「功利主義」はピュリタニズムに基づくアメリカ合衆国の建国理念でもある。資本主義の典型的な国家であるアメリカでは、その発展は急速で

あり、その分、歪や矛盾が多く出現している。貧困、格差、差別はすでに常態化しており、資本主義の発展から取り残された階層での不満は爆発寸前である。しかし、マルクス左派加速主義の言う、その不満、矛盾が資本主義体制そのものの崩壊になかなか結びつかないのが現状である。マルクスが予言した革命は未だ起きていない。逆に、この現状のもとで

右派加速主義が大躍進しているのである。効果的加速主義者は政治家トランプを代表に、起業家では「GAFA」(グーグル、アマゾン、アップル、マイクロソフト)、マイクロソフトのビルゲイツ財団は有名である。最近ではテスラとエヌビディアを加えた六社「MAGANA」のすべての創始者がこの思想に関係している。その代表格であるE・マスクが現在信奉しているのが「長期主義」である。この一見、SF小説じみた空想主義が今後世界を支配するのではないかという懸念がある。否、我々が気付かないうちに、もうこの世界はその方向に進みつつあるのかもしれない。

(3) 長期主義とは

「効果的利他主義」の倫理的態度は、「目の前の困っている百人を救うよりも、その財源で一人人を救う技術を開発する方が、より道徳的な選択肢である。」だ。これ故にウォール街やシリコンバレーで高い収入を得る能力に恵まれた者は、ポ

ランティア活動などで無駄な時間を費やすのではなく、もつとも効果的な慈善団体に寄付することで、生涯の労働時間当たりで換算してもつとも多くの生命を救うことができる。」と論じる。だが現在では効果的利他主義は、これから生まれてくる者も含めてさらに多くの生命を救うべきだという「長期主義」へと進化している。

E・マスクが信奉している「長期主義」の理論家、今話題のオックスフォード大学の若き哲学者W・マッカスキルは言う。「未来世代は重要である、という単純な前提から始めて、どのような結論が導かれるかを探つていこうと思う。未来に生まれるであろう人類の数(生命の価値)は、いまの世代に比べてとても多く多い。だとすれば功利主義者は、未来の世代の利益を現代の主要な道徳的優先事項のひとつとすべきだ」と。

長期主義とは一言で要約するならば、未来の世代への影響や長期的視点を重視する倫理的および哲学的立場、ということになる。この立場によれば、私たちの行動や意思決定は現在の状況だけでなく、未来の世代にも不可逆的かつ劇的な影響を与えうる。たとえば気候変動や大気汚染は、現在生きている人々だけでなく、何世代も先の未来の人々にも影響を与える。長期主義は、未来の世代にとって最大限に良い結果をもたらすような行動や政策を選ぶことこそが現代における道徳

的な優先事項に他ならない、と主張する。マッカスキルは、もつと簡潔に、「長期主義は」未来の世代の利益を守るために、私たちのすべきことは今よりずっとたくさんあるという考え方」であると説明している。

突飛な発言や行動で目立つE・マスクが人類宇宙移住計画に熱心なのは、この「長期主義」の影響である。彼は極端に言えば現在のウクライナやガザの戦争を止めさせる努力をするよりも、もつと長期的なスパンで知力と財力を注ぐべきであると主張し行動しているのである。このような態度は、「目の前の悲劇に目をつむる」といった批判の対象になっているが、そもそも「長期主義」はもつと大きな「人類の存続」というものをテーマしているからこれを意に介さない。彼らの最大の問題は「人類の滅亡」である。そのためには多くの人間が生存する必要は必ずしもないと考える。核戦争や環境破壊のために地球上の人間の99パーセントが失われても、残る人類が宇宙のどこかに残っておればそこからまた人間の歴史は始まると彼らは考える。そしてこの残された人間こそがポストヒューマンであり、過去の一人の人間の何万倍もの能力を持つからわずかな人数でもすぐに過去の繁栄を取り戻せるはずと考える。これが「長期主義」である。

この「長期主義」は突拍子もない極端な思想と一見思われるかもしれない。し

かし、よく考えてみれば現在の世界における人間の不可解な対応をよく説明している。知られているように世界はわずか1%の上流階層の意思で動いている。彼らの利益を最大にするための乱開発による異常気象、軍事産業の儲けを拡大するための戦争、すべてはこの思想が生み出す結果である。この世界の不条理、不合理を合理的に思考するために「長期主義」が生まれた。新しい「終末論」であり新しい「歴史主義」である。

哲学者ヘーゲルは「ミネルバのフクロウは迫り来る黄昏に飛び立つ」と言った。古い知恵の黄昏の中から、新しい知恵が生まれ、到来を告げ、知恵の女神の使者（哲学）が飛び立ってゆく。そのようにして、人類は歴史の中を前へ前へと進んでゆく。近代に始まった人類自己破壊の歴史は、「長期主義哲学」によって再び蘇り、飛び立つのか。

大峯奥駈道（82）

下村 嘉明

体験型人間学 32

人は、それぞれに、悩みを抱え生きて

いる。親しい親方が、定年を控えて現場で働いている。彼とは、以前にも一緒だったので親しく話をする。

彼は、60歳を過ぎた爺さんだ。疲れた疲れたといつも言うのだが、毎日、休まずに来て現場の見回りをしている。施工管理士2級の資格を持っているから現場監督ができるのだ。その資格について聞くと、意外な話だった。昔は、講習を受ければ簡単に取れたそう。もう1週間、講習を受けたら1級がもらえたそうだ。今でも悔やむと言う。1級と2級では、まるで違うからだ。建築設計事務所をやっていたという人も同じような事を言っていた。

彼が気張って働かなければならない、大きな理由は経済的な理由だ。金がないからだという。話を詳しく聞くと、半年前に奥さんが突然家で苦しみだして救急車で運ばれた先の病院で検査を受けた結果、大腸がんでステージ3と診断を受け緊急手術を行ったが、うまくいかず当日の夜に再手術、入院1か月した後、退院したが、がんの転移が心配だが、奥さんは、酒が好きで毎日飲んでいる。彼は、酒が飲めない。

奥さんは、55歳と若いから、転移が早いかもしいれないという。奥さんは、病院嫌いであったそうだ。彼の財布には、いつも10万入れているそうだ。何があるかかわらんからだという。

ボケ老人の雑記（その5）

明石 幸次郎

連日35℃を超え、日によつては、38℃近くになる猛暑が続いています。日本の気象条件は温暖気候帯から亜熱帯に変わってきたと、地球温暖化の影響を身をもつて感じていきます。

昨年近く前に仕事で行った、インド、パキスタン、バングラデッシュ、スリランカなどの気候は今の大阪の日の気候と、よく似ていたようにここ4、5年は思います。

当時バングラのダツカの町を歩いた時のくらくらするような暑さと、汗が沸いてくる不快感、そんな中でも忙しく走り回っている、汗くさいランニングシャツ姿の若者がうじゃうじゃいました。荷物を担いで運んでいる者、人を2人乗せて人力車で、車をすり抜けて走っている者、タクシー、人力車の客引きの若者、物乞いをする子供、赤ん坊を連れた女性など炎天下帽子も被らずうろろろしていました。

今はどうかは知れませんが、あんな炎天下の中で、動き回れる勤勉な？人達は、将来何等かの環境が整えば、必ず経済が発展して豊かになれるのでは？とか日本に連れて来たら、暑い中でも工事現場でも一所懸命に働くのでは？と思つたものです。今や、あのユニクロも中国から、ベ

トナム、それからバングラデッシュと大規模な縫製工場を移転させ、大きな雇用の機会を与え若者が多く働いて、経済発展に寄与しているようであります。

「月末にドイツに住んでいる息子の家族が夏季休暇で帰って来ました。息子は16年以上ドイツに住んでいるので感覚的には外国人です。まず帰国して目についたのが、インド並みの暑い中、閑空で警備員の多くは高齢者が多く赤い顔して働いている。大阪駅に着いたら、ここでも多くの高齢者の警備員が、工事現場、交通整理など炎天下で顔を真っ赤にして働いている。

又、電車を降りて家に向かう途中の建築現場、道路の補修工事をしてると必ず何人かの警備員が働いているが、皆年取つたお父さんくらいな年齢の人“が働いている。これはヨーロッパに住んでいる者からすれば、「年寄りを虐待しているように思えるわ。特にドイツでは、これらは皆、移民してきた多くの若い人仕事で、ドイツ人の高齢者は絶対働かなくても、生活保障がされている。

第一に年取つて肉体労働をするという考えがなく、掃除、清掃業、工事現場、電気工事、警備員などは完全に移民の仕事で、感覚的にも分業になっているようですね。日本であれば、職業差別とか、歳を取つても働くのは美德であるとかの感覚はあるが、向こうでは底辺の汚れ仕事、警備員、外での肉体仕事などは、自

分たちの仕事ではなく外国人の仕事である

と思つてゐるようです。息子に「お父さんの友人に警備員を喜んでやつてるのがあるが」というと「ドイツ人の年寄りでは、そんな職業に対する考えはあり得んわ！国民性の違いというより、お父さんの友達はドイツ人からしたら、好きでやることも信じられないし、第一、年寄りは働かなくても良いように生活保障がされている。友達以外の年寄りが警備員で働いているのは、生活費を稼ぐためやろ？そこが、日本のおかしいところやと思う。外人が見たらあの年取つた警備員を見たら奇異に思えて、日本は先進国かと驚くのでは？皆、礼儀正しいし、第一勤勉で暑い中でも文句も言わず、通行している人に頭を下げてニコニコしている、こんな姿はドイツでは考えられんわ。日本人は大人しいと言うか、年取つて自分たちにまだ働けと言うんかと賃金を上げるといつてヨーロッパやったらデモが起きるがー」とか言つてとにかく不思議がつていました。

息子の嫁は、「ドイツの学校では、教室、廊下、トイレ、手洗い場などの掃除は一切生徒はしなくて、かたづけ、清掃は移民の人の特に女の人の仕事です。ある時、あまりにもトイレの使い方が汚く、ごみなども散らかしっぱなしでひどいので、清掃の人達が頭に來たらしくストを起こし、掃除をボイコットしました。それで仕方なく、先生方は生徒に注意を

したようで、少しは改まつたようす。

とにかく日本人の感覚とは違い、自分達が少しでもごみをかたづけたり、掃除をする、移民の人の仕事を奪つてしまふという考えが小さい時から身につけています。二人の子供は土曜日には日本人補習校に通わせているがここでは、掃除とかは生徒にやらせて日本の学校のようにやつてます。何か日本人としては、どこかで使い分けをしないといけないので、子供に対しての教育も難しいところがありませんね」ということです。

それでドイツ、北欧、フランス、イギリスは何方かという肉体労働のどのしんどい仕事は移民に任せ、自分たちは出来るだけ知的労働をして稼ぎ、高い税金を払い、その代償として、歳を取るとリタイヤして生活保障を国から受け取る。その保障で悠々自適の老後を送るといのが、老人の権利であり当然の姿であるようです。

日本のようなインド並みの気候になろうとしている先進国が一億総動員で働け、年寄りも100歳の時代、70歳まだ若い、80歳まだもう少し働けと尻をたたかれ、年金受給は65歳から、いや今後は70歳になるかも知れない社会が果たして幸せな社会であるかどうか、大いに疑問であります。

オクラの山たより(96)

困了生

一

先回、樋口一葉の父親である樋口則義がお金で御家人の株を買い同心となつて見事に武士になつたという話をしました。このことについて「はあ？」と思われた読者の方もおられると思うので、ここで江戸時代の身分制度のことについて少しばかり述べてみます。

小生も含めて還暦を過ぎた人たちは小学校以来の日本史の授業で江戸時代は「士農工商」という身分制度、つまり「武士」「農民」「職人」「商人」という順序で決まっている身分制度が強固であり、農民を武士の次の身分とすることで「生かさず殺さず」とされた農民の不満を上手にコントロールしていたのだ、と教えられてきました。しかし、近ごろの中学・高校の日本史の記述には、この我々に馴染み深い「士農工商」の言葉は出てきません。これは日本近世の歴史研究が進んできたことによるものです。

そもそも「士農工商」は古代中国で使われた四字熟語で漢の歴史書である「漢書」に登場して、その意味は「あらゆる職業の人たち」であり、身分の上下を示す言葉ではありませんでした。そもそも中国の古典では「士」とは「武士」のことではなく、「知識や見識のある人、役

人」といった意味です。

この言葉は奈良時代に日本にも伝わり平安初期に編纂された歴史書「続日本紀」にも用例があります。「士農工商」を日本社会の社会（身分が分けられた社会）に強引にあてはめて使い始めたのは江戸時代の儒学者たちでした。江戸時代には漢学者たちぐらゐの間で使われていた「士農工商」の語は、明治になって「四民平等」が高らかに唱えられた結果、古い江戸時代の旧弊をあらわす言葉として広く人々の間に広まってきました。

では、江戸時代の身分制度は実際のところはどようになっていたのでしょうか。江戸期の人々にとって身分は支配者である武士と被支配者である百姓と町人の二つがあるだけでした。被支配者のうち村に住む者は百姓（農民）で、町に住む者は町人（職人・商人）であり、百姓と町人の間には身分の上下関係はありませんでした。居住する場所や職業による区分であつたのです。以上のような理解から現代の教科書から「士農工商」の語は消えたのです。

しかし、だからといって身分制度がないというわけではなく、江戸時代の職業が親から子へと「家」を引き継いでいく世襲制であつて、この世襲制が身分制度の基本であつたことには変わりなく、よほどのことがなければ武士の子は一生武士であり、農民の子は一生農民であつたわけです。

この原則が少し揺らいでくるのが江戸時代後半の時期、つまり「しだいに経済力がものをいうようになった時期」です。この時期になるとお金を出して武士の身分を得ようとする人が多くなりました。お金を出せば武士になれるという藩は珍しくありませんでしたが、驚くのは武士になるための料金表を公にしている藩もあったことです。たとえば伊達政宗を祖とする仙台藩。この藩に残された史料によれば「百姓に帯刀を許す」のに必要な料金は五〇両、「百姓に名字を許す」のに必要な料金は一〇〇両、「百姓が武士の戸籍に入るのを許す」のに必要な料金は二五〇両でした。二五〇両といえば現代の二五〇〇万円ほどです。これではよほどの貯えのある豪農でなければ払える金額ではありません。あまりに高い料金のために希望者が少なかったためか、後になるとこれらの料金は半額にされています。それでも高額です。仙台藩としては武士という身分にはそれだけの値打ちがあると考えていたのでしょう。

このように投げ売り同然に武士の身分を売っていた理由は、もちろん、各藩の深刻な財政難でした。財政難とはいえりストラをして武士の総数を減らす訳にはいかず、かといって日に日に窮乏していく家臣を救う余裕は藩にはない。それならと武士の資格を売って、資格を買った者を養子として「家」を存続させた方がよい。おまけに家臣たちを長年苦しめた借金の返済も新たに家を継ぐことになった「富裕の者」の責任となる。「武士の誇り」というものへのこだわりを少し捨てれば、いいアイデアではありません。江戸後期の各藩、そして、その家臣たちはそれほどに経済的に窮乏していたというのでしよう。

そういつた視点で見ると幕末に活躍したヒーローにはお金で武士になった人の子孫は珍しくないのに気づきます。たとえば土佐の坂本龍馬。龍馬の曾祖父である坂本八平直海は豪商才谷屋の長男でしたが、郷士の株（土佐藩には上士と郷士の二種類の武士がいてお金で買ったのは郷士の方だけでした）を買って分家して土佐藩士となりました。

もう一人あげれば勝海舟。海舟の曾祖父銀一は越後国三島郡の貧農の子でした。生まれつき目が不自由で江戸に出て当時盲人に許されていた高利貸しとなって財をなし、朝廷より盲官（盲人で琵琶、鍼、按摩などを業とするものに与えられた官名）の最高位である検校を買って「米山検校」と名乗ります。さらに銀一は旗本男谷家の株を買って末子の平蔵に継がせました。海舟の父親である勝小吉はその平蔵の三男であり、そのため旗本の勝家に養子に出されました。勝家は一五七五（天正三）年以前の御家人で御目見得以上の幕臣でしたが、小普請組（無役）の家でさほど豊かな家ではありませんでした。勝小吉は生涯無役で喧嘩を好み剣の腕前も確かで幕末の侠客で江戸町火消しであった新門辰五郎に「喧嘩で勝小吉に右に出るものなし」と言わせたといえます。この勝小吉とその子勝海舟の話はよく時代小説に書かれたり時代劇にされたりしています。

ついでに言えば長州藩出身の伊藤博文も百姓の子でした。ただし、伊藤博文の場合はお金で武士の資格を買ったわけではなく、父親とともに伊藤家に養子に入つて士分となりました。藩士といっても伊藤家は足軽身分の下級武士でしたが。

二

さて、樋口一葉の父親樋口則義と母親たきの話です。一八六七（慶応三）年十月十四日に將軍慶喜が大政奉還を奏して江戸幕府が瓦解した三ヶ月前（正確には慶応三年七月十三日）に南町奉行所同心で三〇俵二人扶持の禄高でありながら重い病気のため奉公不可能となって生活に

困窮していた浅井竹蔵から御家人の株を購入して幕臣になったということまでは先回のべました。そのときに浅井竹蔵と取り交わした証文が残っています。それによれば浅井家を相続の願いを提出したとき前金五〇両を払い、それが許可された場合には後金五〇両を出すこと。相続した後は、樋口は浅井と改姓し、浅井家を盛り立てて竹蔵の老母を引き取って病気で先の短い竹蔵にかわって何不自由なく暮らせるように面倒を見ること。菩提寺を浅草にある浄土宗の正安寺に移すこと。といった条件を樋口則義は承知して御家人の株を買った。これら条件を樋口則義は正直に守つたでしょうか。いやいや機を見るに敏な則義のことです。幕府崩壊のゴタゴタという大きな混乱の時期をよいことにして彼はこれらの条件はほとんどやむやんしてしまいました。浅井姓に変えることなく樋口姓はそのまま続け、浅井竹蔵の老母ひさはしばらく預かりますが、金を付けて浅井家の方へかえしてしまい、菩提寺の浄土宗の正安寺も樋口家の浄土真宗とは宗旨が違つたというので後に本願寺に変えてしまっています。明治の新政の時代となったからは八丁堀の同心もとうに消滅しており、則義が浅井家に義理立てする道理はないと彼は考えたのでしよう。以後、浅井家とはまったく絶縁となります。

しかし、則義には浅井家が抱えていた三百両に近い借金という問題が残っていました。といつてもこの借金の大部分は寛政の改革で困窮する江戸の住人に土地を担保にして低利貸付けなどをする目的で設置された江戸町会所で借りた負債でしたので、これも明治維新のゴタゴタで返済する必要がなくなつてしまいました。則義にとつてはまことにラッキーなことでした。

一八六八(慶応四)年九月八日に明治と改元され、樋口則義はそのまま身分を明治新政府によつて保証され新政府の下級役人となることができました。以下、少しわずらわしいのですが、彼の経歴を追つてみます。あわせて家族の歴史も少し書き加えます。

一八六八年七月
新政府から身分の安堵を認められ、赦帳撰要下役となる。

一八六九年七月 東京府権少属を拝命。
一八七一年二月 東京府少属を拝命。

一八七二年五月二日(新暦)

なつ(夏子または奈津、のちの樋口一葉)誕生。このとき父四十一歳、母

たき三十七歳。姉・ふし十四歳。長兄・泉太郎七歳。次兄・虎之助五歳。

一八七四年九月 東京府中属を拝命。
六月二十二日

妹・邦子(くに、国子)誕生
十月十二日

長女ふじ、駿河台の土族和仁元龜と

結婚。翌年七月、離婚。

一八七五年三月

法令により東京府士族となる。

一八七六年 東京府中属を退官。

退職金は百六十円。

樋口則義は一八六九(明治二)年に東京府構内の長屋に住んでいましたが、その後、一八七六(明治九)年までに転居を三回おこない本郷六丁目にある二三三坪(約七七〇㎡)屋敷(その地は東大正門である赤門の真向かいに当ります)を五五〇円で購入しています。このときの樋口則義の俸給は月二〇円ほどで不動産は年収の二年半ほどの価格でしたから、無理のない買物といえますが、この時期、家族六人をかかえていたのですから、かなりの英断でした。では、本郷の屋敷をどうして買う決心をすることができたのか。ここに至るまでの江戸市中の事情と則義の奮闘ぶりを以下に示していきます。

なお、余談ですが樋口則義の武士への思いがうかがわれるエピソードを一つ紹介します。

一八七〇(明治三)年に元同心であった則義は自分の身分禄高を申告するのに本禄十三石、家禄二十六石とし、肩書きは「士卒属」としました。本来、「士卒属」は譜代の上級御家人に与えられる肩書きであり、則義のような下級の御家人は「卒」と書かなければなりません。

た。彼がことさらに「士卒属」と名乗っていることには彼の旧身分に対する並々ならぬ郷愁・思いが感じられます。則義は江戸に出て以来多くの武士たちと交わり、ついには直参の武士となったために「自分は武士である」という誇りを捨てがたがったのでしよう。また妻のたきも二五〇〇石の旗本稲葉家で乳母として奉公して武家のしつけを十分に身につけていた女性でした。それだけに二人が苦勞して得た「直参の武士」という肩書きへの二人の思いは強いものでありました。彼らの誇りは当然のようにその子女への厳しい武士的なしつけとなります。「武士としての義理・体面を汚してはならない」としつけられたのは二人の息子だけではなく、女性である夏子(奈津)・邦子の二人の娘にも強い影響を与えたはずです。よく知られた樋口一葉の肖像写真に漂うキリツとしたつましきは武士の娘として忍従を強いられた結果かもしれません。

三

さて、江戸から明治と変わる中で江戸の街はさまざまな方面で大混乱となりました。中でも大きな混乱は江戸市中の土地価格の大幅な下落です。

江戸時代にあつた参勤交代の制度は江戸市中に多くの大名屋敷を存在させ、その家臣である武士たちを大量に住まわせ

ることになりました。しかし、明治維新となると大名屋敷は不要となり、その長屋に住まわせていた家臣の多くは国元に帰ることになりました。また、旧幕臣たちも徳川慶喜とともに駿河に行く者、新政府と一戦交える者、アツという間に落ちぶれる者さまざまでしたが、それまでの家屋が維持できなくなりました。武士が江戸からいなくなつたせいでしょうか、天保期には一三〇万人を超えた江戸の人口は当時の記録によれば明治五年には八十六万人をきつていきます。住む人がいなくなれば都市は荒れます。江戸の土地の七割は武家の土地でしたから主人のいない土地の荒れようはすさまじいものでした。

江戸の不動産価格はかつて「土一升金一升」といわれるほど高額でしたが、明治初年では屋敷と土蔵付きの物件が一坪二銭五厘まで下落しています。明治七年に販売された木村屋のあんパンは一個五厘でしたから、都心の土地一坪をあんパン五個で買ったのです。

同じ時期に大名屋敷は明治政府に召し上げられ、そして、払い下げられました。この時期、うまく立ち回つて多くの利益を得た者が多数いましたが、福沢諭吉もその一人です。三田にあつた肥前島原藩の下屋敷が払い下げになるとの噂を聞きつけるや、いち早く上納金五〇〇円をおさめ、高台にある一万三〇〇坪の土地を手に入れました。今の慶應義塾大学の

三田キャンパスがそれです。明治五年のことでした。

この同じ年に樋口家は今までの長屋住いから出て下谷の家を購入して移ります。世の中は維新直後の人口激減の時期から徐々に人口増加に転じていました。土地の価格は間違いなく上がる。計算に強かった則義はそう考えた上での家の購入でしたから目的は家を転売して利益を得るためでした。二年後、明治七年にはその家を一三〇円で売却して、麻生三河台の家へ引越します。この年には一葉の妹邦子が生まれていますから、この引越しの連続は母親のたきにとつてかなりつらいものだったに違いありません。そして、二年後の明治九年には本郷六丁目の家を五五〇円で購入して再び転居します。わずか二年の間に四倍以上の不動産を買い替えることができるほどに蓄財ができたというのはまことに不思議です。それをどうやってしたのか。それは「秩禄奉還」と金貸し業によってでした。

四

明治新政府は当初かつての華族・士族に秩禄という俸禄をかつての禄に代りて支給していました。しかし、この支給は国家財政を圧迫したために希望者に秩禄の四〜六年分を前払いする（ただし現金は半額で残りは年利八%の「秩禄公債」によるとされた）代わりに以後の秩禄は

廃止するという「秩禄奉還の法」が一八七四（明治七）年に定められました。しかし、この方法も財政的に破綻し一八七六（明治九）年には「秩禄処分」に政府は踏み切らざるをえなくなります。これはすべての士族の秩禄を廃止し、その代りに秩禄五〜十四年分を支払うという内容でしたが、一度に現金で支給されるのではなく、すべてが「金禄公債」という形をとり実質的の支払われるのは年ごとの利子五〜七%だけでした。下級武士のほとんどがこの処分で生活が困窮したといわれています。

しかし、樋口則義の経済感覚は早い時期に新政府の懐具合を察知していました。彼は「秩禄奉還の法」が出たときに秩禄を永久に払い続けられるはずがないと考えて、早々と希望を提出し四七六円十七銭を受け取っています。一両は一円に換算しますから、これによって御家人の株を買ったときの借金の残り二〇〇両あまりを全部返したとしても二〇〇円以上のお金が手元に残ったことになりました。

この二〇〇円と家を売った一三〇円を元手として樋口則義は金貸し業を始めます。いまでいう「闇金融」業者です。利子は高く貸せば貸すほど利息が集まってきます。今に残る則義の貸付けの記録によれば、本郷六丁目へ転居してからは貸付けの金額がグンと増えています。五五〇円の不動産を買ったということは、ま

だ貸付けにまわす余裕はあったということでしょう。この時期、つまり明治十年頃からの数年間が樋口則義の一家にとつての最も豊かで幸せな生活を送れた時期であったといえます。一八七六（明治九）年、則義は東京府中属を退官しています。八年間の勤続に対して一六〇円の退職金を得ています。もう勤めに出ずとも暮らしていけるだけの備えはあると則義が考えたからでしょう。

満四歳で本郷六丁目の家に移り九歳になるまで住んだ樋口一葉にとつてこの家はおそらく記憶にある最初の家であり、広々とした庭に桜の木が植えてあるこの家を一葉は「桜木の家」と呼んで懐かしんでいます。父親の死後に一家の主となつて貧しい生活に苦しんだ彼女にとつて幸せが一杯つまつた唯一の時期であったのではあるまいか、と思えます。

五

後年、樋口一葉は次のような金銭観を述べています。

ただ利欲にはしれる浮き世の人、あさましく、いとほしく、これ故にかく狂へるかと思へば、金銀はほとんど塵芥の様にぞ覚えし。

苦勞に苦勞を重ねて士族となり、家族の生活のために金貸しまでやっている父親

を幼少の時からみてきたこともあるのでしようが、「利欲に」はしり「あさましく、いとわしく」金銭ゆえに「狂」ってしまっていると思うと金銀はゴミだともいう一葉。考えてみれば、生まれたときにはお金の苦勞を知らずに育てられ「士族の体面を汚すな」と両親から言い続けられてきた一葉が潔癖ともいえるこうした金銭観を持っていたのは当然といえます。ただし、「一円を笑う者は一円に泣く」ではありませんが、戸主となつた一葉はこの金銭のためにさんざん苦しめられます。しかし、それはまだ先の話です。

樋口家はとりあえず明治の初年を金貸しという元武士らしくからぬこともあえてするといふ則義の才覚と奮闘で何とか切り抜けましたが、没落していった元武士たちとその家族も多くありました。

そうした生活の基盤を失った元武士の悲惨な生活ぶりを述べた記事が一葉の日記「よもぎふにつ記」の明治二十五年十二月二十八日にありますので、最後に紹介します。

この日、二〇歳の一葉は小説「暁月夜」の原稿料が入ったので、その一部を生活の足しにしてもらおうと持参して、稲葉鑛（いなばこう）の家を訪れます。

稲葉鑛は本郷湯島三丁目へ屋敷を構えた二五〇〇石の旗本稲葉大膳正方の娘で姫様と呼ばれて育てられました。一葉の母親は長女のふじを出産後すぐに里

子に出し生活のために鑛の乳母として稲葉家に奉公に出ています。ですから一葉と稲葉鑛とは同じ母乳で育った乳姉妹ということになります。

一八八二(明治十五)年に稲葉正方がなくなると、娘の鑛が家督を相続し、二年後に入り婿として稲葉寛を迎えます。鑛の夫となった稲葉寛は何とか没落する稲葉家を盛り立てようときまざまな事業

を手がけますが、ことごとく失敗して、ついに最下層の職業とされた人力車夫

や日雇い人足をするまでに落ちぶれます。極貧の生活となっていく鑛を一葉は

「お鑛さま」と呼んで気にかけて、稲葉鑛・寛夫婦との行き来は日記にもたびたび書かれています。

十二月二十八日の日記は鑛の様子から一葉は書きはじめています。

昔は三千石の姫と呼ばれ、白き肌に綾羅を断たざりに、人の髪はただ枯れ野の芒の様に、いつ取りあげん油気もあらず。袖無しの羽織みすぼらしげに着て、さすがに我を恥じればにや、「さても見苦しき住いで、茶を参らせんもなかなか無礼なれば」とて、うちわぶるぞことに涙の種なり。

「袖無しの羽織」は袖のない羽織で綿入れにしたものです。ふつうは子供や老人が着るもので婦人が着ることは稀でし

た。また、文中の「なかなか」は「かえって」という意味です。

稲葉鑛の生活の貧しさを物語っています。このとき稲葉鑛は三十五歳の女盛りでした。それが貧乏生活の中ですっかりやつれた姿となっています。続いて家の様子を一葉は記しています。

晝は六畳ばかりにて、切れもきれたり。ただわらごみの様なるに、障子はひとところとして紙の続きたるところもなく、見し昔の形見と残るもの卵の毛に置く露ほどもなし。夜具蒲団もなかるべし。手道具もなかるべし。あさましきなりの火桶に土瓶かけて、小鍋だての面影いずにかある。

「卵の毛に置く露ほどもなし」とは「少しもない」という意味で「小鍋だて」とは小鍋で物を煮ながらたべることでせいたくなふるまいと考えられていました。晝も障子もポロポロで夜寝るためのふとんもないような極貧生活です。

唯一の希望は一人息子の正朔(しょうさく)です。この子が陸軍の將軍になってくれたら親も楽になるのに、と稲葉鑛はいうのです。しかし、二年後に夫の寛は亡くなり、子の正朔も小学校に通う頃に亡くなります。その後、稲葉鑛が再婚したことは分かっているのですが、いつ、どこで亡くなったのかは分かりません。

稲葉鑛が書いたハガキが一通だけ現存しています。それを見た一葉研究者は筆跡・文章で見る限りかなりの教養のあった人ではなかったかと報告しています。

同じ貧しいとはいえ赤貧生活を続ける樋口一葉をさらに超える貧しさ。二五〇〇石の自身の家の零落ぶり。乳姉妹という親しさを感じる人の運命をじかに見聞きした経験が小説家一葉にはあったということは記憶しておいてもよいことでしょう。

思えば、樋口家も父親の樋口則義の才覚と頑張りがなければ稲葉家よりもつと悲惨なことになったのは間違いない、せん。則義よくやった、です。しかし、明治十年代後半、一葉が思春期を迎えるころになると樋口家に暗雲が立ちこめてきます。それは次回の話題です。

【補遺】

◇ 明治元年〜十年の「一円」の価値

本文に書かれた時代の「一円」の価値は今のいくらぐらいでしょうか。研究者によると一円は五万円ほどだろうということ。樋口則義が退職したときの月給は二十円ほどであり、これだと今の一〇〇〇万円ほどになります。則義の時代にはまだ「賞与(ボーナス)」というものがありませんでした。日本で始めて「賞与」が出たのは一八七六(明治九)年十

二月のことです。出したのは郵便汽船三菱会社でした。公務員にも「賞与」が出るようになるのは明治十年代以降のことです。そういったことを考えると則義は退職間際には今の課長級くらいになっていたそうですから、今の賃金より少しばかり高かったといつてよいでしょう。ついでにいえば、木村屋のあんパンが五厘でした。今の二五〇円です。日本最初の商品で専門店のパンでしたから、高いかどうかは微妙なところでしょう。

なお、後年、稲葉鑛のもとを訪問したとき樋口一葉は小説「暁月夜」の原稿料の一部を生活の足しにと鑛に渡ししました。小説「暁月夜」の原稿料は十一円四十銭(原稿用紙三十八枚の作品で原稿用紙一枚三十銭)でした。明治二十五年の一円の価値は今の二万五千円といえますから、一葉が手にした原稿料は今の二十八万五千円。「原稿料十円のもりなりしを」と一葉は想定外の収入に喜び「理を押せば五本の指の血筋ならねど、さりとておなじ乳房にすがりし身の、言はば姉ともいふべきを『いでや喜びはもろとも』とて柳町の裏屋に貧苦の体を見舞ひ」かたがた稲葉鑛の家を訪ねます。生活の足しにとお金を手渡そうとする一葉とかつての自身のお姫様だった鑛の間にもどのような会話がなされたのか。それをいろいろと想像するのはドラマの一場面を見るような気がします。

隠された歴史(71)

満田 正賢

私は、前回、倭の五王につながる前期九州王朝から、継体・安閑・宣化と続き宣化の嫡子に継承された後期九州王朝への移行に関する仮説を提示させていただきました。今回は、日本書紀・欽明紀に記された、任那日本府の「阿賢移那斯(あけえなし)」、「佐魯麻都(さろまつ)」に焦点を当て、継体によって滅ぼされた前期九州王朝(倭の五王に続く筑紫の君磐井)の配下の人物の残影を追います。

欽明紀の大半は百済との交流関係を中心とした朝鮮半島記事が占め、少ない近畿の記事の中では、むしろ蘇我稲目の方が存在感をもちます。欽明天皇自体は幼名も年齢も不詳であり、即位にまつわる記事の中には不可思議な点が多く存在しています。私は、「隠された歴史(22)」、「(23)」などで、欽明紀に隠された真実を明らかにしました。欽明王朝は蘇我馬子が粉飾、創作した王朝であり、欽明紀は、宣化の嫡子(古事記が記す倉之若江王、日本書紀では倉稚綾媛皇女という皇女に置き換えられている)が那津官家に移り立ち上げた後期九州王朝(筑紫天皇家)を隠匿しています。

日本書紀の欽明紀は、ほとんど後期九州王朝の史書と百済本記に依存していると考えられます。蘇我馬子が創作した欽

明王朝は欽明紀の後の敏達紀において、はじめて実態が記され始めたと考えられます。ちなみに蘇我稲目が大臣になったのは宣化期であり、欽明紀の蘇我稲目の行状は後期九州王朝の臣下としての行状が記されていると考えられます。一方、蘇我馬子が大臣となったのは敏達期であり、この時期に近畿に残った勢力の独自の行状が記され始めたと考えます。

今回の主題である、欽明紀の「阿賢移那斯(あけえなし)」、「佐魯麻都(さろまつ)」に関する記事を抜粋します。訳文は原本現代訳日本書紀(山田宗睦訳)を使用しました。

① 二年、秋七月、百済は、安羅の日本府と新羅とが計を通していると聞いて、(中略)安羅の日本府の河内直が新羅と計を通したことを、はげしく責め、ののしった。(百済本記はいう、加不至費直、阿賢移那斯、佐魯麻都ら、未詳。)

② 四年、十二月に百済の聖明王はまた前詔を、群臣にあまねく示して(中略)(群臣らは)「また河内直、移那斯、麻都らが、なお安羅に住んでいるのなら、任那はおそらく建てるのがむづかしいでしょう。だからあわせて「上」表して、本処(国)へ移すよううぐべきです。」といった。

③ 五年、二月、百済は、施徳馬武(せとくまむ)、施徳高分屋(こうぶんおとく)、施德斯那奴次酒(しなのししゆ)

らを任那に遣使して、日本府と任那の早岐らとに語って、(中略)別に河内直(百済本記はいう、河内直、移那斯、麻都。しかるに語がなまって、その正しい「形」は未詳。)に、「昔から今まで、ただただ汝の悪を聞く。汝の先祖らは(百済本記はいう、汝の先「祖」那干蛇甲背(なかんたこうはい)、加獵直岐(かろうじき)甲背。またはいう。那奇蛇(ながだ)甲背、鷹奇岐彌(ようがきみ)。語がなまって未詳。)どれも、よこしまないつわりの心で、「人を」誘い説いた。(中略)いま天皇に奏する「使いを」遣って、汝らに移して、その本処に還すよう願おう。「そのとき」汝らはまた来て

「移還の勅を」聞くがよい」といった。

④ 五年、三月、百済は、奈率阿壬得文(なそちあとくとくもん)、許勢奈率(なそちあとくとくもん)、日本天皇のところに)遣わし、上表して、(中略)任那が召しても来ないのは、任那の意「向」ではありません。阿賢移那斯、佐魯麻都の、よこしまで口先ばかりなのがつくったことです。(中略)いま的臣、吉備臣、河内直らは、みな移那斯、麻都の指示に従っただけです。移那斯、麻都は小家「の」出で身分の低い者ですけども、もっぱら日本府の政「治」をほしいままにしています。また任那を制して「執事」をさげぎって「百済」に遣りませんでした。

このため、同じく計「画」して、天皇に答え奏することができませんでした。」

(中略)(*日本天皇は)詔して、『的臣らが(らとは吉備弟君臣、河内直らを用いのである。)が新羅に往来したのは、朕の心ではない。(中略)、的臣らが新羅に往来して、まさに農耕することができたとは、朕がかつて聞いたところだ。もしまったく任那を建てたなら、移那斯や麻都は、自然に退くだろう。いうまでもないことだ。』といました。(中略)安羅に近い処は安羅が農耕して、久礼山(くれもれ)に近いところは、新羅が農耕して、それぞれが自分「の」処を耕して、「他の」処を「侵」したり奪ったりはしませんでした。しかるに移那斯、麻都は、他の境をこえて耕し、六月に逃げ去りました。

(中略)百済は道が遠く、「危」急を救うことができない。的臣らが新羅に往来したことによって、まさに農耕することができたと奏するのは、上は天朝を欺き、いよいよよこしまで口先だけのことです。

(中略)臣がふかくおそれますのは、佐魯麻都のことです。韓「女」の「腹」に生まれたの「だけ」けれども、位は大連に居り、日本の執事の間に入りこみ、榮えて富貴の列に入りました。それ

を

なのに、いまは逆に新羅の奈麻礼(なまれ・十七位階の第十一)の冠をつけています。

(中略) 伏して願うのですが、天皇がふかくとおく観察して、すみやかに「移那斯、麻都を」本処に移して、任那を安んじてください」といった。

⑤ 五年、冬十月、百済の使人、奈率得文(とくもん)、奈率奇麻(がま)らが、「国へ」かえっていった。(百済本記はいう、冬十月、奈率得文、奈率奇麻らが日本よりもどつていうには、「天皇に」奏したところの河内直、移那斯、麻都らの事は、報える勅がなかった。)

欽明紀に記された移那斯・麻都とはいったい何者でしょうか。

欽明紀五年三月条の「佐魯麻都、雖是韓腹」について日本古典文学大系(岩波書店)日本書紀は次のような注釈をつけています。

「通証(日本書紀通証Ⅱ江戸時代の注釈書)は百済人の意とし、集解(書紀集解Ⅱ同じく江戸時代の注釈書)は韓婦所生の日本人の意とするが、二月条分注に引く百済本記に麻都の先を那干蛇甲背とするのによれば、前者に従うべきか。もしそうになると、麻都の本処、本邑とは百済をさすことになる。」

この注釈の意味は、『甲背』という姓(かばね)は日本にない姓だから、百済

人であろう。しかし、百済人であるならば、百済王がわざわざ日本天皇に、移那斯・麻都を本処に移してくれと直訴するのはおかしい」という意味です。そもそも「甲背」という姓は(日本書紀に記された)日本にはない姓ですが、同様に百済の史書にも見当たらない姓です。移那斯・麻都に関する記述を全体的に解釈すれば、日本書紀が記していない別の日本人社会が存在し、そこに「甲背」という姓があつたと理解するのが自然ではないでしょうか。なお、原本現代訳日本書紀では、集解の韓婦所生の日本人の意であるという解釈をとっています。

続く「位は大連に居り」という記述について考えてみます。百済本記は、佐魯麻都のことを「韓」女「腹」に生まれたの「だけれども」という文章に続いて、「位は大連に居り、日本の執事の間に入りこみ、榮えて富貴の列に入った。」と表現記しています。この「大連」に対する日本古典文学大系日本書紀の注釈は次のようなものです。

「日本府に大連という地位の名称があつたかどうか不明であるが、麻都は的臣、吉備臣、河内直らの下位であつたと思われるから、朝廷の大連に比するほど高い地位ではない。」

しかし、任那日本府が、日本書紀が記す朝廷の傘下にあつたとするならば、臣下の最高の地位である「大連」という名称を出先機関の下位役員の名と

して用いるでしょうか。この注釈も、日本書紀が記していない別の日本人社会が存在し、その社会にも「大連」という地位があつたという可能性を無視していません。前期九州王朝が連・臣という位階を定めていたかどうかは検討する必要がありますが、おそらく、前期九州王朝の高官が任那に居住していた時、現地で作つた子が父親の地位を継いだということではないでしょうか。

そして、移那斯・麻都に関わる一連の記事によつて、移那斯・麻都と日本天皇(*後期九州王朝の天子を示す)の立場が見えてきます。欽明紀の本文は、新羅と通じていた任那日本府(任那の日本人社会の表現か?)の責任者を河内直として

いますが、百済本記は移那斯、麻都が任那日本府を牛耳っており、新羅と通じる主犯者であると記しています。

これは、自らが派遣した人物を任那日本府の責任者とする後期九州王朝の建前と、前期九州王朝時代から任那日本府にいた移那斯、麻都らが、当時も引き続き任那日本府を事実支配していた実態を知る百済との違いが表れていると考えられます。百済本記はそのことを、「移那斯麻都は小家」の出で「身分の低い者ですけども、もっぱら日本府の政」治をほしいままにしています。」という表現で記しています。

次に、日本天皇(Ⅱ後期九州王朝の天

子)の、移那斯・麻都に関する百済王の直訴の取り扱いについてです。欽明二年夏四月条に百済の聖明王の言葉として「日本天皇の詔するところは、(中略)」という記述があります。この「日本天皇」は後期九州王朝の天子であると考えられます。百済からの再三の要請にも拘わらず、なぜかこの日本天皇は移那斯、麻都を強制帰国させてはいません。その理由は、後期九州王朝が前期九州王朝の配下であつた人物を強制的に排除することに対する、前期王朝の支配下にあつた勢力の反発を危惧したからではないでしょうか。

今回は、任那日本府の「阿賢移那斯(あけえなし)」、「佐魯麻都(さろまつ)」に焦点を当てることによつて、倭国の王朝交代に伴う、朝鮮半島での倭国の旧王朝残存勢力と新王朝からの派遣役人たちの混乱した実態を百済の目と日本天皇(倭国の新王朝Ⅱ後期九州王朝の天子)の目を通して見てきました。今回は、前期九州王朝(倭の五王とそれに続く筑紫の君磐井)の時代の朝鮮半島における所業を「阿賢移那斯」、「佐魯麻都」の先代の記述を通して眺めてみたいと思います。



俳句

影山 武司

間延びせし時計の鳩や油照
 蟬時雨入念に掃く八幡社
 一分の黙禱に降る蟬時雨
 白内障兆す眼や晩夏光
 立秋の富士を遮るものものなし
 秋立つやピザに真白きモツツアレ
 ラ
 黙禱に時間の止まる原爆忌
 折り鶴の首やや傾ぎ広島忌
 語り部の深き息継ぎ原爆忌
 八月の少女の胸のふくらみぬ

◇ 十四ページからの続きです。

私から何もかも盗る熱い夏 幸子

経験した記憶にない今年の猛暑。お洒落も出来ず、おんなの細やかな楽しい時間も盗って仕舞う夏だった。盗るが効いている。

お供えはお酒二本で足りませんか 百子

コップ一杯には半分、二杯には一杯と夫の健康を想えば渋っていた。佛さまになった今、仕方も無いが後悔として残る。浴びるほど飲ませてあげたい。残された者の愛。

鍋料理夢見てせつせ種を蒔く 静代

季節の野菜はその日その日の市場で買う生活をしている人には、こんな句は作れない。露を払い取りたての野菜の味噌汁はいいだろうな。冬の鍋料理の野菜は夏に種を蒔く。季節と生きる強さもきつとある。

編集後記

S K 生

地球温暖化のためか、なかなか秋は来ない。「熱さの夏はオロオロ歩き」といったのは宮沢賢治だが、小生も夏バテで思いのほか動きが悪くなり、今月号の発行が遅れてしまった。一言おわびを申し上げる。



ナツズイセン



台湾ホトトギス

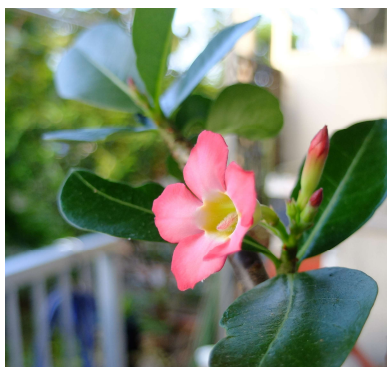


スイレン



瓜棚にて

何年か前に鉢植えのガジユマルをもらった。冬には葉を全部落としてしまつて、春になつても芽を出さなかった。それが六月頃から大きな葉を伸ばし始め、八月に入るとピンクのきれいな花を咲かせた。



そのとき何を思ったか私は、「ガジユマルの花が咲いた―いい爺さん、いい婆さんに会いたいね」と添え書きをし、川柳も添えて葉書を送った。

暑中お見舞いを申しあげます。
一平米五百ワットの日の光
沸騰する地球に生きてさまはない
何というさままだ飛んでもない夏だ
本当に地球はまるい星ですか
大國は天動説をまだ捨てず
戦争も平和も死語とまだならず

本当の夏のトマトに出会えない

それから我が家では、盆の前後二週間
にわたって沖縄と関西から来た小一か
ら中三までの四人の孫たちが夏休みを
過ごした。まさしく台風一過。しかし息
つく間もなく、次には本当の台風10号
が九州を襲い、のろのろと日本列島を通
過、雨風を巻き散らして行った。

それぞれに飛んでもない夏が終わつ
て九月、『芥川だより』がまた号を重ね
る。

『綺羅星 千代子』

植え継ぎの母によく合うサンガラス

千六

田植時の季節感、小さな事象を見逃さ
ない繊細な川柳感がやさしい。

田植が終り、植え継ぎの母のサンガラ
スが似合っていると云う作者の母に感
謝の気持ちもあり、田圃とサンガラスの
コントラストが洒落ている。

(注:「植え継ぎ」にはいろいろな意味
があるが、ここでは田植機で苗を植えた
後に出きた欠株の箇所以後で稲の苗を
手植える作業を言う)

話し合いやはり忖度してしまつ 正彦

誰もが持っている人間の弱さをさら
りと詠みながら、読み手にしっかりと
納得させる実力は見事。

今日も又明日へと予定伸ばす常 和俊

自分を曝け出す句は説得力がある。作
者の句には毎回、尽きないほどのそんな
句が多い。常に自分を客観的に観察して
いるのだと思う。

まだ脈があるか試しに手を握る 土竜

生きてゆくための人との関わりは大
切なもの。どんな展開になろうとも相手
を知る事も大事。下五の手を握るが万感
を示す。

握手は微妙な伝達力がある。

嬉しいなひ孫パクパクいなり寿司

みつこ

孫の句は川柳界では人気度は低い感
はあるが、この句のフレーズが効いて
いる。

自分が作りたいなり寿司をひ孫がパ
クパク食べる様子はうれしく、ババ冥利
に尽きる。

川柳は楽しむジャンルだけでよい

幹夫

川柳を楽しむ人、人生を懸ける人、多
種多色。十人には十色の人生があり、川
柳に向かう方向は違つても川柳魂は一
緒。

手のひらでしっかりと包む遠い過去

秋子

永く生きるほど過去はどっさり。昨日
の事を忘れたりしても、忘れられない過
去が手のひらに浮いてくる。生きると云
うことは過去を積み上げる。

ウナギ屋の瀬戸で食べたい握り飯

洋治

土用のうしの日のウナギの季節を、第
一句に詠うのは読み手を誘う。それも並
ではない握り飯を持ってウナギ屋の瀬
戸の匂いで食べるといふ、切なさど滑稽
さがいい。

思い出のつまった家も今空家 千恵

散歩していると軒並みに空家がある。
一軒一軒の歴史を物語るのが哀しい。そ
の家のドラマを想像させる、世相に辿り
つく。

◇ 以下の文章は十三二ページにあり
ます。